

「あの、瑠璃子さん。教えていただきたい事があるのですが……」

銀古を訪れた瑠璃子は、銀古の従業員、珠にそう願われて彼女を見る。

ここにやってきたばかりの頃はひどく痩せていて、髪はぱさぱさ。みすぼらしさばかりが目立った娘だった。磨けば十分に光るだろうに、表情も覇気がない上に薄っぺらく、意思も感じられずにつまらなかつたものだ。無性にイライラして当たり散らすほど。

けれど、今は線の細さは変わらないが血色は良くなり、そっけない三つ編みは相変わらず野暮ったいが、艶を帯びた。アレならば髪をいじるのも楽しいだろう。

何より、かすかにだが表情が変わるようになった。その愛らしさは、評価してやっても良い。まだまだ生まれたての子猫のような娘だが、以前よりはだいぶマシである。

このように、自分から教えて欲しいと願い出られるようになったのだから。

「あたくしに何を教えて欲しいの？」

「お手紙の、便せんというのは、どのように選べば良いのでしょうか」

瑠璃子は黙って珠を見返した。

彼女は、おずおずと心底申し訳なさそうな顔で瑠璃子を伺っている。

悪いことを要求している訳でもないのに、そうも気弱げにされると、もっとしゃんとしなさい！ と言いたくなる。しかしこれが彼女の通常であり、彼女の今までの境遇が原因なのだ。それくらいは瑠璃子も分かっているため、指摘はしない。よけい萎縮すると分かっているからだ。

だがしかし、珠は今なんと言った？

「……確認なんだけど、便せんを選ぶってことは、手紙を書きたいの？」

「は、はい！ あの、もちろん銀市さんには許可をいただきました。私的なお手紙は無駄だ、書くなといわれる旦那様もいらっしゃったので、不安だったのですが、『君が書きたいのなら書くと良い』とおっしゃっていただけで。墨と筆まで貸していただけたんです」

「まあ、手紙くらい、誰に禁止されなきゃいけないのってところでしょうよ」

いつの間にか、銀市を名で呼ぶようになった彼女はそれなりに成長しているのだろう。

だがしかし瑠璃子は、ほんのりと安堵を浮かべる珠を前に顔色は変えずとも、思考をめぐりし回転させていた。

珠の境遇は銀市から簡単に聞いている。だから故郷の両親に送るものでもないだろう。ほかの勤め先の知り合いとも考えづらい。さらに言えば、珠は「私的な」と言ったのだ。

このまだまだ情緒が赤ん坊のような娘が、自ら、手紙を出す？

いつの間に、そこまで考える相手ができただのか。

その衝撃に瑠璃子が珠を凝視していると、珠がひるんだ様子で胸の前で指を握った。

「ご迷惑でしたら、聞き流してくださると……」

「ああもうそうじゃないったら！ こっちが返事する前に結論づけて、引き下がるのやめなさい！ ここに置いてある便せんを封筒見せてあげるからっ」

「は、はいっ」

珠が背筋を伸ばして応じるのに、鼻を鳴らした瑠璃子はずかずかと以前使っていた部屋へ歩き出す。だが、小走りで付いてくる珠をちらっと見た。

「銀市さんは、止めなかったのね」

「？ はい」

「それで……」

瑠璃子は言いかけて、ためらった。誰宛の手紙を書くのか、という問いは、彼女のプライベートに関わる部分だ。瑠璃子は自分がかかなり威圧的に見える事を自覚している。珠自身に聞けば、確実にひるむ。たとえ好奇心で知りたかろうと、珠が自主的にやろうとしている事を邪魔するのは、瑠璃子の矜持として許せない。

好奇心は猫をも殺すが、猫又である瑠璃子は、自由を誇りとしているのだから。

「……どうせ文香とかも知らないでしょ。手紙に使うほかの物も見せてあげる」

「っありがとうございます！」

瑠璃子がそう、言い直すと、珠は嬉しそうにはにかんだ。

小さな野花在ほころぶようなその笑みに、肩の力が抜けてしまう。

ささやかな変化だ。おそらく、そのように微笑んでいる事すら自分で気づいていないのだろう。まだまだ危なっかしくて、面倒を見てやらねばならない子だ。自分がこうして人間をかまう羽目になるとは思わなかったが、どうにもほだされてしまったのだから仕方がない。

色づく表情の魅力に無頓着な娘を、野放しにできるわけじゃないではないか。

ひとまず、後で銀市を問い詰めることに決める。

そして瑠璃子は、珠の吸い込まれそうな双眸が輝くことを期待して、便せんを封筒を広げて見せたのだった。